



これは特大の鍵穴ではない（1991年12月29日）

左におわすは、我が愛車のジムニーで、この車は自慢ではないが軽自動車である。車幅は1.4mと狭く、運転しながら助手席側のハンドル式の窓を開け閉めできるのは、私の腕が長い為だけではない。28mmの広角カメラによる写真の歪みもあるが、それにしてもジムニーの幅とトンネルの幅にさして違いがないではないか。電灯もない暗いトンネルの中を、前を照らすだけしか能がないヘッドライトだけで、車の側面ボディを擦らず通過するのは至難の業であった。軽自動車でさえそんな有様だから、果たして軽自動車以上の大きな車が通れるのであろうか。

さてこのトンネルの所在であるが、それははっきりしない。写真を撮ったのは一九九一年も押し迫った十二月二十九日で、紀伊半島は三重県紀勢町、国道260号の雪の錦峠を越え、紀伊長島町、尾鷲市へと移動していた時のどこ

悪路

世の中にはこんなひどい道がある

所詮、車なんていう代物は車が通れるように作られた道路以外は、走ろうと思ってもなかなか走れるものではない。人間なら30cm程度の段差など軽々登れるが、最低地上高がせいぜい20cmの車には到底無理な話である。また人間なら1m程の幅の溝など軽くひと飛びであるが、車は狭い側溝に落ちただけで身動きができなくなってしまう。それは走破性がいいと言われる4WD車の場合についてみても、さして事情は変わらない。よって我々ドライバーはおとなしくお上が決めた道路を走る以外に方法はないのである。しかし車が走るべくして作られたその道路が、時として車の走行を阻むのである。

これはそうしたいわゆる悪路やその他走りにくい道についての経験談だ。いろいろと事情はあるのだろうが、それにしてもちよつと走りにくいんじゃないやありませんかね。

トンネル

写真の正面に見えるのは大きな鍵穴ではない。車が通る為のトンネルというものである。



車の前方に洞穴の様なトンネル (1994年9月25日)

かである。トンネル入口の左にある黄色い看板に辛うじて「羽下」の文字が読める。紀勢町内の国道42号と260号を繋ぐ主要地方道68号紀勢インター線上に「羽下」なる地名があるが、そのあたりかもしれない。

トンネル2

その日、天気は上々で、福井県勝山市から県境を越えて石川県白峰村しらみねむらを目指して走っていた。道は立派な国道157号線が通じているが、そこはそれ、やたらと脇道ばかり走って、なかなか先に進まない旅である。地図を見ると国道の県境は新谷トンネルで抜けているが、「新」と言うからには「旧」があるだろうと、目を凝らしてよくよく見ると旧道があり、県境には谷隧道というのがある。勿論行かない訳にはいかない。迷いながらも見事に旧道に入り込み、快調にとろとろ走る。ところが途中で突然道がなくなつた。どうしたことかと辺りを見渡すと、何やら草むらの中に洞穴がある。更によく見るとそれはトンネルだった。谷隧道である。このトンネルは思いの外長く、またカーブしたり、トンネル内で高低差があつたりで、覗いてみても出口は全く見えない。勿論照明などは皆無であるから、トンネル中は真つ暗である。さすがの私も躊躇せざるを得ない。果たしてこのトンネルは抜け出ることができようか。まさか中にクマや化け物が棲んではいないだろうから、とにかくゆつくり入ることとする。

ヘッドライトに照らされたトンネルの中には、とところどころ廃材が置かれたりして、いちいち

それらをよけて通らなければならない。かなり進んできたのに相変わらず出口の明かりは見えてこない。そのうちトンネル内の浸水箇所に差し掛かった。最初は小さな水溜まりだったのが、道幅一杯に浸水してきて、遂にはタイヤの三分の一の深さにまでなつてきた。水の底が見えないから、大きな穴でもあつて、はまり込んだら大変である。そこで前進は諦めることにしたが、戻るのも大変である。

どうしたものかと考えていると、後ろよりオートバイが一台やつてきた。世の中、物好きはいくらでもいるものがある。結局そのオートバイも私の車が止まっている浸水箇所まで来て、あっさり諦めて引き返していった。私も早く引き返したいのはやまやまだが、トンネルの中は車がUターンできる程広くはないのである。それと車のライトは基本的に前を照らすようにできていて、暗闇をバックで走るには極めて不向きなのである。しかも途中には廃材などの障害物が待ち構えている。しかし、こういうこともあるのかと、来る途中、主だった障害物の位置を記憶していたのだ。



草に埋もれて、路面が見えない（1992年9月14日）



紅葉橋

チェーンが張られて通行止だが、チェーンが無くても渡りたくない

さすがにベテランは違う。バックしながら確か次の障害物は道路の右側にあつたなどと記憶を辿りつつ、慎重に運転する。そして無事に洞穴の外に生還した。しかしこんなに長く後ろを向いて運転したのはベテランの私でもこの時が始めてである。しばらく首の痛みが残る羽目となった。

廃道

そう、あれはまだ世の中に廃道などというものは、そう簡単にはないと思つていたうぶな頃である。朝日スーパール林道を新潟県の朝日村から山形県の朝日村へと走り繋ぎ、荒沢ダムの先で、もう少し林道を走りたいと鱒淵林道に入り込んだ。予定では八久和ダムを越えて国道112号に出られる筈だった。しかし八久和ダムを過ぎる頃から道の様子が変である。普通の林道とはどこか違つている。草が伸び放題に伸びて、道の所在が分からなくなる程である。後悔し始めてきたが、戻るに戻れない。何処かに待避所があるのかも知れないが、草に埋もれてどこまでが地面で、どこから崖なのかもはっきりしないのである。ただただ慎重に前進するのみである。

やっと草むらを抜けて広い所に出たと思つたら、前方に架かる紅葉橋はチェーンで通行止となつていた。チェーンが無くても渡りたくないような橋の先を見ると、崖崩れで道が完全に塞がつている。辺りのさびれ方を見ると、不通になつてから久しいと思われる。これでそれまでの道の荒れ方がひどい理由が分かった。これが廃道と言うものだったのだ。分かったのはいいが、出口が他に無い限り、この道をまた戻らなければならぬ。あまりいい気はしない。それにここ